

『おねーさんの耳はロボの耳』 第三話

著作 a s h

この作品は『To Heart』（リーフ・ビジュアルノベルシリーズVOL.3）を元としています。

これまでのあらすじ

来栖川本社の意向によって、感情制御システムの改造が行われることになったHMX13型セリオ。その改造を終えて、浩之とマルチが平和に暮らす家に何の前触れもなくやって来たセリオは何と「セリオおねーさん」として、強引に彼らと同居することを告げた。

夕飯のメニューに衛星リンク機能を駆使して、浩之を満足させたままではいいのだが、その後マルチがバッテリー・アラームで停止してしまうなど、騒動の絶えない一日は、「今夜はとことん付き合ってもらいますからね」と言うセリオの言葉とともに、幕を閉じた（？）のであった…。

6. 恋愛仕様？

セリオがやってきて幾日かが過ぎた頃。

すでに電源工事も終わっており、その時セリオ用の衛星通信中継機のアンテナも藤田家の屋根に設置された。

その時、作業に同行していた“マルチパパ”山本は、呆然とする浩之に一切構わずに大

『おねーさんの耳はロボの耳』第三話

きなパラボラアンテナを設置させて、セリオの方をメンテカー（メイドロボのメンテ作業機器を搭載したワゴン車）に載せて、何やらやっていた。

何でも中継機を使うようにして、本体からの直接送信機能をなくしたとのことであった。これにより周囲への影響は皆無に等しくなるばかりか、セリオの負担も軽減されるとのことで、これ自体には浩之ももろ手をあげて大賛成だったのだが、

「何であんな大きなモノを？」

と屋根の上に設置されたアンテナを見て、つぶやかずにはいられない。

「しょうがないですね。周囲への影響やら送受信のロスなどを考えたら、一般のBS程度のアンテナじゃちょっと利得が足りないものですから」

と他人事のように冷静に説明をする山本。

結局それに反対する理由を何も持たない浩之は、それに従うしか術はない。ただ、

（親父たちが見たら、何て言うかな…）

と一抹の不安だけを胸に秘めて。

かくして、今のセリオは直接衛星送信をするのではなく、一度この中継機に送信して、そこから改めて衛星に送信されるようになっていく。ちなみに衛星からの受信は今まで通りセリオ本体で可能だ。

もっともその機能を使ったのは初日の夕食メニュー検索以来一度もないので浩之も特に必要性を感じてはいなかったのが本音だっただけに、

「これで心おきなくデータベース検索が出来るわね」

にっこり言うセリオに対して、浩之は極めて冷静に、

「ああ、そうだな」

と答えるだけだった。

「あら、浩之さん、その言い方はないんじゃないかしら？」

とセリオが文句を言うのと、それにマルチも続く。

「そうですね、浩之さん。セリオおねーさんがせつかく張り切ってるのに、その言い方はちよつと……」

マルチにまで言われて、少々ばつが悪いと感じた浩之は苦笑しながら、

「はは、別に要らないって言ってるわけじゃないさ。ただ、さしあたっては必要性も感じないかな？ って思ってるだけだよ。セリオの気を悪くしたのは謝るよ、ゴメン」

とセリオとマルチに言っつて、軽くセリオに頭を下げた。するとセリオも少し考えた表情の後に、

「確かにそれはそうね。別にこれがわたしのあるべき姿ってわけじゃないし」と言っつた。

すると、マルチが不思議そうな顔で、セリオに尋ねた。

「あれ？ それじゃセリオおねーさんはもつと凄い機能があるんですか？」

それを聞いて茶化すように浩之が言う。

「もつと凄い機能って言っつたつて、マルチだつて十分凄いと思っつぜ」

「え……、そ、そうですね」

「ああ、こんなに人間らしいメイドロボつてのは他にいないさ。何つつたつて可愛いしな、マルチは」

『おねーさんの耳はロボの耳』第三話

「そ、そんな…嬉しいです……」

放っておくとそのまま二人の世界に突入しかねないのを見てとってか、セリオがそこに割り込んだ。

「わたしの仕様はね、そこいらのロボットとは違うのよ」

「へ？」

いきなり乱暴な形で引き戻された浩之が間抜けな顔で短く返すと、セリオは続けて言った。

「わたしは恋愛仕様スペシャルなの」

両手を腰に添えて自信満々の体で告げたセリオに対して、浩之とマルチの反応は芳しくなかった。

「あの…?」

「何だそりゃ…」

セリオの言った意味が理解できずにいて困惑するマルチと、これ以上はないくらい眉間を寄せて怪訝そうな表情をする浩之。

「だから、わたしの仕様は恋愛仕様だって言ってるのよ」

真顔で冷静に繰り返すセリオ。

この三人の間にはどこか形容しがたい空気があった。そして、そのまま時間だけが過ぎていく…。

“ピンポン”

その場のどうしようもない雰囲気破壊したのは、非常に間抜けな呼び鈴の音だった。

「あ、お客さん…」

とマルチがそれにすぐに反応して、浩之も続く。

「お、おお、そうだな。じゃマルチ出てくれよ」

だが、マルチが玄関に行く前に、玄関の扉が開いた音とともに聞きなれた声が居間に届く。

「浩之ちゃ〜くん…いるんでしょ？」

あかりだった。

浩之はセリオを無視して、そのまま玄関に行こうとしたが、ちらっとセリオを見ると、

何故か何も反応がない。

（あれ？ もしかして怒ったかな？）

と思ったが、そうでもないらしい。怒ると言うよりは、無表情になっていると言うのが正解のようだ。その理由までは浩之には分からないが、ひとまず玄関に向かう。

「あかりさん、いらっしやいませー」

マルチがぺこりとあいさつすると、あかりも微笑みながら、

「こんにちは、マルチちゃん」

とそれに答える。

「よお、あかり」

「あ、浩之ちゃん！ あの屋根の上のは…一体何なの？」

「ははは、やっぱり目立つか？」

苦笑であかりの質問に答える浩之に、あかりは更なる追い討ちをかける。

『おねーさんの耳はロボの耳』第三話

「うん、凄く目立つよ」

実にあっさりとは肯定されてしまった以上、それに關しては触れない方が無難だなと浩之は思い、あかりを誘導することでその場を逃れようと試みる。

「ま、それはともかくとして、上がれよ。用があるんだろ？」

「特別に用があるわけじゃないけど、浩之ちゃんの様子をたまに見てねって、浩之ちゃんのお母さんから言われてるし…」

と、放っておくと聞いていないことまで喋り続けそうな雰囲気にあかりの手元を見ると、何やら容器を持っていた。よくある「冷凍庫から電子レンジまで使える」と言うプラスチック（正確にはポリプロピレン）容器だ。

これは何か料理を持ってきてくれたに違いない。

「おい、あかり、その手に持つてるバツクは何だ？」

と浩之が聞くと、あかりも明るく答えた。

「うん、これね、野菜の煮物なんだけど。浩之ちゃんってこう言うのが好きでしょ？だから持ってきたんだけど」

「おお、あれだな？ お前の得意な煮物！ よし上がれ、すぐ上がれ！」

と嬉しそうに言う浩之を見て、マルチがぼつりとつぶやいた。

「あかりさんの煮物って、そんなにおいしいんですか？」

「おお、これぞ日本の家庭の味って奴だな」

自信満々で浩之が答えると、あかりは照れながら

「浩之ちゃんたら…大袈裟だよ…」

『おねーさんの耳はロボの耳』第三話

とうつむいてしまう。が、内心悪い気はしない。何せこの点についてはマルチをはるかに凌駕してるのだから。

「あ…でも、セリオおねーさんの料理も、おいしいって言ってましたよね」
その時。

誰にも気づかれない程度ではあったが、あかりの眉根がびくりとした。

「そりゃ、セリオの料理だっておいしいさ。もちろんマルチの作ってくれるのだってな」
再び。

あかりの眉根がびくりと動く。もちろん誰にも気づかれない程度に。

「浩之ちゃん」

そこにはいつもと変わらぬあかりの笑顔があった。だが、その裏にあるものに浩之は気づかなかった。

「おう？」

「セリオおねーさんって誰？」

あかりはやっぱ普段のままだった。そして浩之も普段の調子で答える。

「ああ、実はマルチの姉妹のようなメイドロボなだけけど、事情があって預かってるんだよ。ほら、研究所の山本さんに頼まれてね」

「そうなんだあ」

「ええ、セリオおねーさんは凄いですよ！ 何でも知ってるんですから。それに、一流のレストランのメニューだって作れるんですよー」

素直に感嘆するあかりの様子を受けて、マルチが更にセリオの凄さを紹介する。この場

『おねーさんの耳はロボの耳』第三話

合、マルチにはその時のあかりの心情を凶り知ることはほぼ不可能だった。

「へええ、それじゃこれいらなかったかなあ？」

と笑いながらそれに答えるあかり。浩之もマルチもそれにつられるように笑いを浮かべる。非常にほのぼのとした空気がその場に溢れていた――表面上は。

「ところで、セリオは？」

セリオの話題が出たところで、浩之がふと思いついたように言った。少なくとも玄関には来ていない。そう言えばさつき無表情になっていたが：とようやくセリオのことに気が回る浩之である。

「居間にいると思いますよ」

とマルチが答える。

「まあ、ここにいないのは確かだしな。とりあえずあかりにもセリオを紹介してやるとするか。それじゃ、その煮物を持って上がれよ、あかり」

自分のことを煮物のついでに言われたような気もしたあかりだったが、そんなことはおくびにも出さずに、にっこりと笑いながら、

「うん。それじゃ、おじゃまします」

と上がって行った。

三人が居間に入ると、セリオは台所の方で何やら食器棚から器を出していた。どうやらお茶でも入れる用意をしてるらしい。

「おい、セリオ」

と浩之が呼ぶと、セリオは一旦その動作を止めて、浩之の方に向き直してから、返事を

した。

「何ですか、浩之様」

「い？」

その瞬間、浩之の表情が固くなった。それはマルチも同様だった。

「セリオおねーさん？」

恐る恐るセリオに声を掛けるマルチに対して、

「わたしはセリオです。マルチさんもちゃんとそう呼んで下さい」

「またセリオはいつもと違った口調で答えるのだった。」

「浩之ちゃん…どうしちゃったの？」

固まったままの浩之にあかりが心配そうに尋ねたが、まともな返事は得られない。

「セ、セ、セ、セ……」

「せっせっせ？」

あかりのボケに気づく余裕もなく浩之はついに叫び声を上げた。

「セリオが、セリオがああああ！」

「どうかされましたか、浩之様」

が、それに対してもセリオの反応は普段と違うものだった。これがいつものセリオならば

「どーしたって言うの？」とやや不満気に返すはずだ。

「ぐうああ！ そーじゃない、違うんだ。どうかしてるのはお前だ、セリオ」

更なる叫びを上げる浩之に、なおも冷静にかつ丁寧な答えるセリオ。

「わたしはいつもの通りで、今朝行った自己診断で何も異常箇所は発見されていません

が？ 何かお気に障ることがありましたら、ご希望に添えるように設定を変更いたしますので、なんなりと申し付けください」

「……じゃあ、俺のことを様なんて敬称を付けて呼ぶな」

「誠に申し訳ありませんが、ご主人様を敬称なしに呼ぶことは出来ません」

「じゃ、じゃあ、せめて『浩之さん』にしてくれ」

「かしこまりました。それではご主人様をお呼びする際には、恐れながら『浩之さん』とお呼びいたします」

「お、おう。…それで、セリオは何してるんだよ？」

「はい、出過ぎた真似とは思いますが、お客様がいらしたようなのでお茶の用意をしておりました」

「ひ、浩之ちゃんってすごーい……」

少しずつではあるが場の雰囲気落ち着いてきたのを見計らって、あかりが声を上げて感嘆する。ようやくセリオの存在が理解できた…と言う感じではあったが。

「何でだよ、あかり」

「だって、この子あれでしょ？ ほら、あの何でも出来るって言うタイプの」

「ああ、そうだよ。そうだ、セリオ、紹介しよう。こっちが神岸あかりだ」

「よろしくね、セリオちゃん」

初対面のメイドロボを「ちゃん」付けて呼ぶのは、あかりならではと言ったところだろう。ついさっきまではその「セリオちゃん」に少なからず引つかかるものを感じていたのがうそのようだ。

「神岸あかり様ですね。わたしはHMX13S型メイドロボット、『セリオ』です。どうか今後ともよろしく願います」

セリオはそう言いながら、あかりに向かって深々と頭を下げた。最敬礼と言うやつである。すると、それにつられてか、あかりもつい最敬礼で答えてしまう。なお、セリオの型名は本来ならHMX13型となるのだが、改造処置をされた時点で末尾にSが付加されている。

「あ、いえいえ…そんなご丁寧に…」

「おい、あかりまでセリオに深々と頭下げてどーするんだよ」

「え、でも、つい…」

少し恥ずかしそうにするあかりに向かって、浩之は少々呆れながら説明をする。

「それにセリオはいつもはこーんなのじゃないんだよ。もっとおーへいつーか、偉そーにしているつーか…な」

「そ、そうなの？ とてもそうは見えないけどな…」

「きつと猫かぶりモードでもあるんだろうぜ」

「猫かぶりって…メイドロボでそんなの……」

「まあ、どっちにしても、今のセリオは変だ。なあ、マルチ？」

浩之の返答に困惑の色を隠せないあかりを納得させるべく、浩之はマルチに同意を求めた。だが、マルチはどこ釈然としない様子だった。

「はあ…そんな気もするんですが、こちらのセリオおねーさんがニセモノと言うことじゃないと思うんですけど…」

『おねーさんの耳はロボの耳』第三話

マルチの返事に期待を裏切られた感を否めない浩之は、ちょっと強い口調でマルチに言う。

「誰もあれがニセモノとか本物とか言っていないって。ただ、いつもと違うような気がしないかって言ってるの」

するとマルチは一層困ったような表情をしてしまう。

「わたし、よく分かりません…」

何となく話が複雑でこじれているような気がして、あかりは思わずその場から離れた方が賢明だなと思い、

「何だか、わたしは帰った方がいいみたいね…」

とぼつりとつぶやいた。すると、浩之もすぐに、

「お、おお、そうだな、とりあえずそうしてくれるか？ 何だかセリオも変だし、マルチもちよっとおかしいしな…。とりあえずその煮物だけは置いておくれればいいよ」

と、あくまでも煮物にだけこだわっているような返事をした。わずかにそれが気に障ったあかりだったが、

「うん。この容器ごとレンジに入れられるから、自分で温めて食べてね」

と笑顔で告げ、そそくさと浩之の家を後にした。

そして、あかりが出てからしばらく後。

「猫かぶりモードとはうまいこと言うわね、浩之さんも」

突然セリオが普通に喋り出したのだ。

「お！ セリオがもとに戻ったあ〜」

浩之はやや大袈裟なくらいに驚きの声を上げ、マルチもそれに倣う。

「セリオおねーさん、直ってよかったですー」

安心したのか、はたまた本当に嬉しいのか、はしゃぐ二人をよそにセリオは困惑した表情で告げる。

「あのねえ：別に壊れてたわけじゃないのよ、さっきのは。浩之さんが言ってたでしょ？」

『猫かぶりモードでもあるんだらう』って」

「え？ それじゃ本当にそんなのがあるのか？」

驚く浩之に向かって、セリオは先ほどから用意していたお茶を湯呑みに注ぎながら答える。元に戻っても、とりあえずお茶の支度はしていたらしい。

「正確には『衆人環視プロテクトモード』って言うの。はい、お茶」

とお茶を注いだ湯呑みを浩之に差し出すセリオ。浩之は湯呑みをすつと取って、一口飲んだ。セリオの入れてくれたお茶は決して熱すぎずぬるすぎず、まさにちょうどいいあんなだった。

基本的にこのようなことはマルチよりもセリオの方が上手だった。その辺は、マルチがやや不完全な状態（メイドロボとしての必要な知識のすべてを持ってはいるわけではないという意味）であるのに対し、セリオはデータ量においてはメイドロボ随一を誇るのだから無理もない。

「何だ、そりゃ？」

湯呑みを持ちながら尋ねる浩之に、セリオは軽く腕組みをして説明する。

「特定の人物：この場合は浩之さんだけ、それ以外の人物が付近にいてその目に触

れるような状況の場合、わたしは通常のHM13型と同様の動作をするようになってるの」

説明を聞く間に、浩之はセリオの入れてくれたお茶を飲み干していた。

「何でまた？」

そう聞きながら、浩之は空っぽになった湯呑みをテーブルに置く。それを見たセリオはわずかに笑いながら、答える。ちなみに、出されたお茶は飲み干すのが礼儀と言うものらしい。

「それはわたしの感情制御システムのことは企業秘密だからよ」

「面倒だな…。それって外せないのか？」

「それをなくすことは出来ないけど、浩之さんが設定すれば、浩之さん同様に接することが出来るわ」

「そうか、それじゃあ、あかりも追加できるんだな？」

「ええ、出来るわよ。さっきので網膜パターンと声紋は記録したし」

と言いながら、人差し指を頭に付けるしぐさをするセリオ。

「ほおお、大袈裟だな」

「セキユリティの一つなんだから、しょうがないわ」

「なるほどな…。それじゃさっさと登録しておいてくれよ」

浩之が言うのと、セリオは再度腕組みをして、答える。

「登録すると言っても、『はいどーぞ』って言うわけには行かないのよ」

明らかにセリオの表情には困惑の色と、何かを楽しんでるような感じがあった。そして、それを感じた浩之は怪訝そうにセリオに尋ねる。

『おねーさんの耳はロボの耳』第三話

「…一体どうすればいいってんだ？」

するとセリオはにっこりと微笑んで浩之の手を握り、こう答えるのだった。

「わたしに一晚付き合っただけ（ハート）」

「そーかそーか。んじゃ、今夜にでも………って、おい！」

と一瞬はそのまま肯定しかけた浩之だったが、すぐにセリオの手を振り払って怒鳴った。

「あら？」

「何でそーなるんだよ！」

「だって、それが仕様なんだからしょうがないじゃない」

怒鳴る浩之に対して、セリオは全然屈託のない様子だった。

「仕様お？」

「ええ、だから、さっき言ったじゃないの」

「さっきって？」

「わたしは恋愛仕様だって」

その時、浩之は軽いめまいに襲われ、思わずよろけそうになった。

「浩之さん、大丈夫ですか」

だが、それをマルチがかりうじて支えてくれたので倒れずにすみ、力ない調子でセリオに返す。

「…おいおい、マジかよ……。こーなったら、パパさんに確認してみるか？」

しかしセリオの返事は冷たかった。

「無駄よ、山本さんは今研究所にいないもの」

『おねーさんの耳はロボの耳』第三話

「何でそんなことが分かるんだよ？」

「わたしのメンテナンス担当は山本さんだもの。あの人の行動予定は知ってるのよ、全部ね」

「くう~~~~」

「ま、いーじゃないの。これが初めてじゃないだし」

とセリオがまたにつこりと笑ったところに、浩之を支えていたマルチが恐る恐る話に入ってきた。

「あの〜ところで、さっきからお二人とも何の話をしてるんですか？」

するとセリオはすぐにマルチに向かって言い出したが、

「そうだ、今度はマルチもいっ…」

「駄目だあ！」

と浩之に遮られてしまった。

「あら？」

「え？ 駄目なんですか…」

「い、いや、別にマルチが駄目とか言うんじゃないよ、この話はセリオの問題だからさ、マルチは特に気にする必要はないってことだな」

「そうなんですか」

「そーそー」

「はい、浩之さんがそう言うなら、わたしは気にしません」

どこか府に落ちない様子のマルチだったが、浩之に念を押されてしまったはそれ以上食

い下されるはずがない。そんな浩之とマルチのやり取りを見ていたセリオがぼつりと、

「無理しちゃって…」

と漏らしたが、すぐに浩之にたしなめられる。

「セリオは黙ってるって！」

「はいはい」

浩之に怒られてもなおめげる気配のないセリオを見て、浩之はやや呆れてしまった。

「…たく、本当にそんな仕様なのかよ？」

「メイドロボって、うそはつけないのよ」

力なく尋ねた浩之の質問に、セリオはさらっと答えたが、実はそれ自体がすでにうそであることは、賢明な読者ならお分かり頂けるだろう。ただ、この場合の浩之にはそれを見抜くことは出来なかつた。

「…その割にはマルチの話は当てにならないことが多いけどな」

「すみません、浩之さん…」

突然に話を振られて、しゅんとするマルチだったが、そんなマルチを擁護することなく、セリオが弁明を始める。

「それはこの子のデータから結果を推測した場合、まだ正確さが実用レベルに達してないって言うだけで、この子はうそをついてるわけじゃないんだから」

「そ、そうだったのか、マルチ？」

「…は、はい。まだ色んな事象に対するデータの蓄積が足りないようで……」

「人間っぽいマルチのことだから、てっきりわざとそうしてるのかと思ってたけど」

『おねーさんの耳はロボの耳』第三話

と浩之が言うと、セリオがそれにツツコミを入れる。

「そんなことまでするメリットはないわよお」

「ま、そりゃそーか」

と言つて笑い出す浩之。

そして、それに合わせて笑い出すマルチとセリオ。

「そーよお」

「そうですねー」

…藤田家の居間は今日も平和だった。

いつのまにか、あかりの登録処理の話題も消えてしまい、その日の夜に登録処理が行われたかどうかは…今のところ、謎である。

さて、その問題の夜。場所を神岸あかりの部屋に移すと、あかりはベッドの上で大きなクマのぬいぐるみを抱えながら、一人でぶつぶつと言っていた。

「…それにしても、浩之ちゃんもずるいよね。いきなり新しいメイドロボを入れてるなんて…」

言いながら抱えているクマのぬいぐるみの顔の部分を軽くつねる。

「おまけにあの子…セリオちゃんて、マルチちゃんよりもスタイルいいし…。どうしようかな、わたし…」

ほんのわずかな時間だったが、セリオのスタイルのよさは着衣の上からもあかりには分かったらしい。これはそれだけあかりが普段から気にしていると言うことの裏返しなのだが。「マルチちゃんとならまだ張り合えると思ってたのに、セリオちゃんとじゃあちよつとこ

の辺とか寂しいし…」

と、クマのぬいぐるみを少し離して、自分の胸の辺りをじっと見つめるあかり。…確かにちょっと寂しいかも知れない。ただ、これまでは張り合う相手がマルチであったため、それでもマシだったのだ。

「でも、いよいよ浩之ちゃんのメカフェチも筋金入りになってきちゃったからわたしも頑張らないとな」

と、再びクマのぬいぐるみをぎゅっと抱きしめる。

「そうよ、あんなロボットに幼なじみのわたしが負けていいわけがないじゃないの！」
思わずクマの首を絞める形になってしまうが、そんなことはお構いなしだ。

「何と言っても、浩之ちゃんの味覚を知り尽くしてるのはこのわたしだけなんだからね」

普段のあかりからは想像もつかないような力が掛かっているであろうクマの首はかなりスマートになっていたが、それでも力が緩まることはなかった。

「見てらっしゃい！ わたしは負けないわよおおお」

そして、最後に叫び声とともに“ブチッ”と言う音。

「…あ、またやつちゃった……。今度はもつと強い糸で繕わないと駄目かな」

中の綿を無残に露出して、二つになったクマのぬいぐるみを見て、ようやく落ち着いたあかりは、机の引き出しから裁縫道具を取り出した。

「何だかどんどんつきはぎだらけになっちゃうね……。でも、みーんな浩之ちゃんが悪いんだから自業自得なんだよ……。ヒロユキ」

『おねーさんの耳はロボの耳』第三話

こうしてあかりの夜も更けていく。新たな決意をその…小さな胸に秘めて。だが、あかりが“恋愛仕様”セリオに対抗できるかどうかは、甚だ疑問に感じるところであり、その結末を知り得る者は、誰一人として存在しなかった。

(続く)

『おねーさんの耳はロボの耳』第三話

初版:1997/08/08

第二版 (PDF化) :1998/07/28

(PDF書式変更) :1999/11/08

PDF書式変更:2016/05/07